様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０５５９

研究課題名（和文）情報操作のデザイン：理論と実証

研究課題名（英文）Information Design: its theory and practice

研究代表者
稲木　昭子（Inaki, Akiko）

追手門学院大学・国際教養学部・名誉教授

研究者番号：５０１５１５７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　文体論研究における手法と射程を拡大し、新たな領域の開拓に資することができたと考える。対象データをフィクション等の書かれたテクストから話しことば、さらにメディア報道等に拡げ、従来の伝統的な文体研究の手法に加えて、語用論・関連性理論・認知理論などの最新の知見を取り入れた広範にわたる意味理論を応用し、英語による情報操作のデザインに隠された誤誘導、誘導、織込み等のトリックのレトリックを考究し、包括的な分析を行った。さらに言語分析を深化するためにスモールコーパスを構築し、量的分析による実証的な裏付けも行った。

研究成果の概要（英文）：This study contributes to the development of new areas in stylistics studies in discovering the design of information manipulation in English and extending its range from four points. First, we expanded the target data from written texts of fiction to spoken language, and furthermore to media reports. Second, we applied a new theory of meaning incorporated with the latest findings in fields such as pragmatics, relevance theory and cognitive theory. Thirdly, we investigated tricks in rhetoric, such as inducement, false induction, and weaving, in examples of information manipulation. Fourthly, we built corpora to deepen the language analysis furnishing quantitative support.
We published one book and nine papers in total, and gave a presentation ‘Information Design in Ackroyd’ at an international conference, PALA 2014.

研究分野：英語学、文体論、語用論、英語コーパス研究

キーワード：情報操作のデザイン　トリックのレトリック　新しい文体論の質的・量的研究　書きことば　話しことば　メディア

１．研究開始当初の背景

(1) ウェーバー(Jean Jacques Weber)は1996年の編著で、言語学的文体論の新たな方向性を示唆し、文体はテクストとその読み手との相互関係を通して生み出される効果であると指摘し、テクストからコンテクストへの拡大を主張した。コンテクストを、全ての社会歴史的、文化的、テクスト的要素を包含するものとして導入し、語用論的・批判的・認知的な観点などからのコンテクストを重視した文体論の可能性を指摘した。

(2) 本研究はこの新しい方向性を踏まえ、さらに具体的な方法論として、コンテクストを重視した質的研究による意味面の精査に加えて、テクストを重視した量的研究による形式面の精査を補助的におこない、レトリックに隠されたトリックも踏まえつつ、多層的な分析方法をとることにより、より精密な言語的文体論研究を極めようとするものであった。

２．研究の目的

本研究は、英語における情報操作に焦点を当て、そこに隠されたトリックのレトリック（誤誘導、誘導、織込みなど）を解明することにより、ことばの仕組みと働きの考究をめざす。そのためには、言語哲学・論理学･統語論･意味論･語用論･文体論･認知言語学・関連性理論・語法･コミュニケーション論・情報構造論・談話分析等の知見を利用した広範にわたる意味理論を用いた言語分析を行うとともに、コーパス言語学の手法を取り入れたデータの処理で分析の徹底化を図る。取り上げるデータは大きく三分野とし、①書きことばの代表として推理小説を中心としたフィクション、②話しことばの代表としての演説、さらに③両者を含む日常的なものとしてメディア報道をとりあげる。そして英語の情報操作に関するデザインを通した新たな文体論研究の可能性を探究する。

３．研究の方法

(1) 対象データのケーススタディを重ねることにより新たな融合研究の可能性を探究した。初年度は、情報操作の中で作者により意図的に織込まれた誤誘導について、書きことばの代表として推理小説を題材に研究の基礎固めを行った。これまで収集した例文の質的分析、さらに新しく選択した推理小説のスモールコーパス作成と分析を推進するとともに、最新の言語学的文体論の知見を反映させて、質的分析の推進と深化を行った。

(2) 2年目は、誘導による情報操作を扱い、対象データを話しことばに絞り、たとえば演説や戯曲や対話形式のジョーク等を取り上げた。演説は多くの場合、あらかじめ用意あるいは構想されており、それだけにその効果をあげるために言語情報のデザインは強く意識されたものとして捉えられる。また対話形式のジョークは、情報を過不足なく提供するという会話の原則から逸脱したことばの使用によって聞く方に驚きを演出するもので、そこにはあからさまな誤誘導のテクニックが見られる。

(3) 3年目は、メディア報道を中心とする日常の言語使用にまでその分析対象を広げた。メディア報道は、さまざまな形態が取られているが、イデオロギーなどの織込みに注意を払う必要がある。たとえば、リファレントの特定化、引用と発話行為の報告の仕方における情報操作をウェブ上の情報やアメリカの主要新聞記事を比較した。誘導という明確な意図はなくても、どのような立場から事象を捉えるか、という構図の取り方や、使用することばや表現に、話者の主張や偏った情報が織込まれている。

４．研究成果

(1) 初年度は、書きことばの代表として推理小説における情報操作の言語学的分析および

スモールコーパス作成と分析を行った。最初に、代表者および分担者各自が蓄積してきた情報操作の例をデータベース化し、キーワードによる分類を行った（非公開）。その後研究代表者は、アガサ・クリスティの作品のコーパスを新たに作成し、その言語処理から出てくる人称代名詞の使用箇所を表すプロット表示から推理作家のフェアネスが担保されている点を明らかにし、さらにこの論文も含めて『謎解きのことば学』を上梓した。分担者は、フィクションにおける出来事は、必ずしも生起した順序で語られるわけではなく、物語世界の出来事の中から提示する情報を取捨選択し、それをいつ、どのように提示するかにより、読者の心理的反応が異なる点に着目した。そのような心理的反応の中からサプライズを取り上げ、サスペンスなどと比較しながら、その構造やそれが生じるメカニズムを考察した。また別の分担者は、近年の文体論と物語論における「テクスト内の言語的特徴」から「テクストをとりまく認知的語用論的特徴」への展開をふまえ、語りのデザインと解釈の関係について考察した。とりわけ、推理小説の情報操作における語り方や情報の出し方などに着目し分析を行った。

以上のように、質的研究による意味面の精査に、テクストを重視した量的研究による形式面の精査を補助的に行い、より精密化を図った。

(2) ２年目は、話しことばにおける情報操作の言語学的分析およびスモールコーパス作成と分析を推進した。代表者は、2009年のアメリカ大統領就任演説の一回目、4年後の二回目、これに先だつ民主党大会の大統領指名受諾演説、および共和党の対立候補者の意図性の高い演説をコーパス化し、量的分析による実証的な裏付けを行いながら、情報操作のメカニズムの一端を、代名詞による切り替えと指示対象の拡大という観点から分析した。分担者は、会話体形式のジョークの構造や落ちの仕組み、あるいはそこで使われている情報操作の手法を考察した。ジョークは相手を一定の方向に誘導しておいてそれを裏切ることによって驚かせ、その結果笑いを生み出すことを目的とするが、その技法は、推理小説などのフィクションの語りとも共通するものである。さらに別の分担者は、説得の談話について、戯曲を題材に、メタ言語を含むメタ談話を手がかりに、作者ないし登場人物がどのように情報をデザインして提示し、評価や態度を入れ込み、そして情報の流れを管理ときには操作するのかということをみた。

話しことばの言語材料としては、演説、ジョーク、戯曲など多岐にわたるものを取り上げ、これら言語材料における情報操作のメカニズムを意味論的・語用論的点から分析を深化させた点は、より精密な言語的文体論研究の成果として発表できたと考える。さらに特徴的な比喩表現の役割についてはとりわけジョークを題材に分析を行った。

(3) ３年目は分析対象をメディア報道へと拡げた。メディア報道は、書きことば、話しことば、さらには新しいマスメディアであるWEB上のことばなど、さまざまな形態が取られるが、いずれの場合もイデオロギーなどの織り込みに注意が肝要である。誘導という明確な意図はなくても、どのような立場から事象を捉えるかという構図の取り方や、使用することばや表現の中に、送り手の主張や偏った情報の織込みが行われることは珍しくない。代表者および分担者の3名で、「メディアと情報操作」というテーマで論文をまとめた。メディア報道における名詞表現のリファレントの特定化という観点から各国の報道機関に見られる差異について、また他者の発言の引用のしかたや、発話行為の報告における動詞やリファレント使い分けという観点からアメリカの新聞報道に見られる情報操作

についての分析を行った。これはメディアリテラシー能力涵養の一助になると確信している。

さらに、The University of Maribor, Slovenia で開催された PALA 2014（Poetics and Linguistics Association,）国際学会に参加し、‘Information Design in *Ackroyd*’というタイトルで研究発表を行い本申請研究の成果の一端を問うた。本発表は、クリスティの『アクロイド殺人事件』における情報操作を、モダリティ、副詞や語り損ねなどの言語的技法から分析したものである。この発表の詳しい内容は、現在 PALA 2014 Proceedings On-Line に掲載されている。学会参加中は世界各国の大学研究者との交流を深め、研究上有意義な情報交換を多数行うことができた。

(4) ことばによって仕掛けられた「情報操作」に焦点を絞り、広範な意味論的・語用論的枠組みを構築することを目的とした本研究は、特に次の４つの点で評価される。

先ず１点目は、従来の伝統的な文体研究の手法に加えて、語用論・関連性理論・認知理論など最新の知見を取り入れた広範にわたる意味理論を用いた言語分析を行った。

2 点目は、対象データを推理小説を中心とするフィクション等の書かれたテクストから、演説等の話しことば、さらにはメディア報道などに拡げて包括的に行った。

3 点目は英語の情報操作のデザインに隠された誤誘導、誘導、織込み等のトリックのレトリックを解明し、さらに被伝達者の推論まで操作するという点にまで踏み込んだ形で、新しい英語の情報操作のデザインを包括的に考究した。

4 点目は、言語分析を深化するためにスモールコーパスを構築し、量的分析による実証的な裏付けを行い、情報操作の全容とそれを可能にするメカニズムを解明した。

従って本研究は従来行われてきた個別の文体論的理論の融合を図って、英語の情報操作のデザインを通した新たなる文体論構築に資することができると考えられる。さらには、現代社会に溢れる情報の中からしかるべき情報を精選するリテラシー能力を涵養するうえにおいても、大きな意義を持つと思われる。それゆえに本研究は、文体研究における手法と射程を拡大し、新たな領域を開拓するものであると自負している。

(5) 本研究では、ことばに仕掛けられた「情報操作」に焦点を絞り、言語学的観点からそのメカニズムを研究することにより、個別の表現を超えたメタ的な情報操作の全容に迫った。さらにはリテラシー能力を涵養するうえにおいても、社会的教育的意義を確認したといえよう。今後の展望としては、これら有標の情報操作を踏まえ、いわば無標の日常的な言語活動における情報デザインというより広い観点へと射程を拡大し、情報伝達におけることばの仕組みと働きを考究する方向へと展開することで、本研究で確認した文体論研究の新しいありかたを推進していく。

具体的な展開策として、平成27年度～29年度科学研究費基盤研究（C)「情報デザインのことば学」（15K02598）に引き継いでゆく。新たな研究では、本研究の成果を踏まえ、ミクロとマクロのレベルでのことばにおける情報デザインの精査と統合を行う。また、研究の射程を、本研究で行った意図的な情報操作から、日常的な情報伝達の活動へと拡大する。卑近な情報伝達においても、多くの可能性の中から特定の言語表現が選択されるまでの過程、すなわち言語使用者の意図、さらに被伝達者が行うであろう推論に向けた情報デザインがあることを実証することにより、さらなる意味論的・語用論的そして文体論的枠組みの構築の推進を図る。すなわち「情報デザインのことば学」へと発展させていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 堀田　知子、稲木　昭子、沖田　知子、メディアと情報操作、龍谷紀要、査読有、36-2、2015、119-130
② Akiko Inaki, Tomoko Hotta and Tomoko Okita、Information Design in *Ackroyd*、PALA 2014 PROCEEDINGS ON-LINE、査読有、2014(http://www.pala.ac.uk/uploads/2/5/1/0/25105678/akiko_tomoko_tomoko.pdf)
③ 稲木　昭子、演説における情報操作―代名詞の切り替えと指示対象の拡大―、英語文化学会論集、査読無、23、2014、17－38
④ 堀田　知子、話しことばにおける情報操作―ジョークを中心に―、龍谷紀要、査読有、35-2、2014、61-75
⑤ 沖田　知子、説得のデザイン―戯曲の場合、言語文化研究、査読有、2014、39-59 (http://hdl.handle.net/11094/27617)
⑥ 稲木　昭子、人称代名詞と作家のフェアネス、『謎解きのことば学』、査読無、2013、99-117
⑦ 堀田　知子、情報操作のトリック―サプライズ―、　龍谷紀要、査読有、34-2、2013、193-204
⑧ 沖田　知子、情報操作のデザイン―推理小説の場合―、言語文化研究、査読有、39、2013、31-51(http://hdl.handle.net/11094/24711)
⑨ 沖田　知子、移ろう語り、時空と認知の言語学 II、査読無、2013、11－20

〔学会発表〕（計１件）

① Akiko Inaki, Tomoko Hotta and Tomoko Okita、Information Design in *Ackroyd*、PALA (Poetics and Linguistics Association)、2014年7月18日、Maribor, Slovania 査読有

〔図書〕（計１件）

① 稲木　昭子、英宝社、謎解きのことば学、2013、135

６．研究組織
(1)研究代表者
稲木　昭子（INAKI, Akiko）
追手門学院大学・国際教養学部・名誉教授
研究者番号：５０１５１５７７

(2)研究分担者
堀田　知子（HOTTA, Tomoko）
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号：９０２０９２５５

(3)研究分担者
沖田　知子（OKITA, Tomoko）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：５０１２７２０５